

保育内容の指導法「表現」における授業方法の検討 ～パネルシアターの実践から～

溝口綾子
帝京短期大学

A study of teaching to “The guidance method of childcare contents (expression)” ～ Try for Panel theater ～

Ayako mizoguchi
Teikyo Junior College

1. はじめに

幼稚園教育要領¹⁾は、学校教育法における「幼稚園の教育課程その他の保育内容に関する事項」を明らかにしたものである。学校教育法23条では、5項目の「幼稚園教育の目標」を示しており、そのそれぞれが、保育内容の5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」に相当する。

保育所保育指針²⁾では、保育の内容として「養護に関するねらい及び内容」と「教育に関するねらい及び内容」がある。この「教育に関するねらい及び内容」に幼稚園と同様の5領域が示されている。

この5領域は、小学校の各教科と考え方は全く別のものである。つまり、5領域とは、「生活」や「遊び」というそもそも保育（授業）時間を細分化することでは実現できない総合的主体的な活動を構成しているものである。すなわち、保育者が子どもにふさわしい教育課程（保育課程）を提供できるように日々考えていくための5つの視点である。従って、保育者の対応は、この5領域にまたがる視点から、子どもの生活にかかわろうとして起こるものなのである。

領域「表現」の目標は「音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通して、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと」である。

本授業では、幼児のありのままの表現、内心の要求を理解するために、幼児は表現することによって何を体験するのか、幼児の表現を育てる保育とは何かについて学習する。平成19年度の学生による授業評価によると、「授業の理解」や「授業の内容への関心」についての評定平均は3.8である。学生にとっては授業への期待や興味、関心は高いのに、充実感までには至っていないのではないかと考える。それは、学生が子どもの「表現」について理解できても、あるいは理解しようとしても保育者を目指す学生自身が「表現者」として実践体験が少ないからではないだろうか。

この領域「表現」における幼児への保育者の援助や役割は、保育者自身の表現性と大に関係する。保育者が、一人ひとりの幼児の感性や表現を受け止めたいと願うならば、まず、保育者自身の感性や表現が豊かに高められることが大事である。そのためには、保育者自身の表現体験や表現技能を専門的に身に付けることや、表現者として幼児のモデルとなったり、感動を与えたりすることが大切である。

本授業では、パネルシアターやペープサート、人形劇など、実際に製作し実演する体験学習を取り入れ、学生が保育者として自己表現する機会となるようにした。このような体験学習によって学生にもたらされるものを追求し、授業改善の方向性を明らかにしたいと考える。

2. 保育者が支える表現

浜口(2007)³⁾は、「子どもは豊かな感性の下地になるものは持って生まれるといわれているが、それを発揮させ、さらに育てるのが保育者の役割である。感性を育てることは、表現を育てることである。子どもの感性を育てるには、子どもの豊かな感性に気づき、それを受け止める保育者の「感性」もまた必要である。」と述べている。この保育者の「感性」とは、たとえば、日常生活の中で、野に咲く花を美しいと感じたり、空を飛ぶ鳥のさえずりに耳を傾けたりする姿であり、その姿を目にすることこそが、子どもの感じる心や表現する心を育むことになるのである。保育者も日常保育の中で、歌ったり、踊ったり、楽器を鳴らしたり絵を描いたりもする。その動機は、表現する楽しさを子どもに伝えるためであったり、楽しさを共感するためであったりする。また、保育者が表現するその行為は、子どもたちに大きな影響を及ぼす。子どもたちは生き生きと楽しそうに表現している保育者を目にすることにより、表現することの楽しさを味わうのである。

本授業で行ったパネルシアターは、物語を絵で表現し、それを使って保育者が話したり歌ったりして進めていくものである。正しく保育者の表現力が問われるものである。この体験学習を通して保育者志望の学生は、何を学んだのであろうか。授業者の意図するところを汲み取ることができたであろうか。次の項では、実際に取り組んだ授業での内容を述べる。

3. パネルシアターの実践

(1) 「パネルシアター」の実践指導プログラム

表1は、こども教育専攻科44名の保育内容の指導法「表現」の中での「パネルシアター」の実践指導プログラムである。この実践指導プログラムは、パネルシアターを体験学習することによって、パネルシアターについて知るとともに、表現モデルとしての保育者について理解し学習していくものである。

表1. 「パネルシアター」実践指導プログラム

実施日	指導事項
6月23日(月)	・「パネルシアター」とは 講義表2参照 ・グループ(8～9人)を決めて、グループごとに題材である物語を選択する。 ・役割分担(配役、舞台装置、ナレーター)を決める。 ・台本の読みあわせをする。 ・次回の製作に必要な用品や道具を確認する。(黒マジックペン、はさみ、カッター)(パネル用紙、絵の具は授業者が用意する)

6月30日(月)	パネルシアターの製作 ・場面と登場人物(絵人形)を決める。 ・絵柄を考えて下書きし、黒マジックで線描する。 ・アクリル絵の具を塗る。 ・形を切り抜く。
7月7日(月)	練習をする。 ・グループごとに、絵をパネルに貼りながらせりふの練習をする。 ・歌や、効果音などを考えて入れてみる。 発表をする。 ・グループごとに、全員の前で実演する。 ・一人ひとりが、体験に基づいた自己評価を言う。 ・他のグループの感想を聞く。
7月14日(月)	「パネルシアターの実演で学んだこと」についてレポートにまとめる。 テーマ：表現者としての保育者が行う「パネルシアター」をグループで実際に製作し、実演するという体験学習の結果から、「表現すること」について、わかったこと、意見、問題点、感想などを書きなさい。

(2) 「パネルシアター」とは

パネルシアターを体験学習するに先立って、パネルシアターとは何かについて講義を行った。その内容については表2のとおりである。

表2. 「パネルシアター」とは⁴⁾

<p>パネルシアターって何? 四角いパネル上に、絵人形を貼ったりはずしたりしながら、歌をうたったり、お話を語ったりしていく。パネルはフネルやパネル布を張ったボードで、そこに不織布に絵を描いて切り取った絵人形を付けていく。絵人形をパネルに貼ると、両方の繊維が結んでくっつく。</p>
<p>パネルシアターの特徴 1. 作ったり演じたりが手軽にできる…絵人形の材料である不織布は、ペーパー状なので絵が描きやすく、切り取りも簡単である。 演じ方・遊び方は絵人形を貼ったりはずしたりするだけなので難しくない。 2. 演じ手と子どもたちはパネルを介して一体感を感じる…演じ手は子どもから見たパネルの右側に立ち、子ども達の反応や表情を確かめながら演じることができる。子どもはパネルで演じられている内容や演じ手とを同時に見ることになるため、演じ手の人間性に触れながら、歌やお話の世界に入り込んでいく。</p>
<p>パネルシアターの楽しさ 子ども同士が一緒に見たり聞いたり、歌ったり考えたりする中で、演じ手も含めて様々な作品に触れて楽しさを共有することができる。また、その作品の持つ色彩や構成の面白さなどを楽しむことができ、いろいろな作品を通して創造性を豊かにする。</p>
<p>楽しく演じよう! ①事前のポイント ・パネルは子どもがみやすい目の高さにする。傾斜をつけて設置するとよい。 ・設置場所は、光の当たり具合(逆行に注意!)を考えて子どもが見やすい場所にする。絵人形を置く台をパネル裏に用意して絵人形を出す順番に並べておく。 ②演じ方のポイント ・保育者はパネルに向かって右側に立つ(絵人形の出し入れやパネル上での操作がしやすい) ・明るく表情豊かに演ずる。 ・作品によっては絵人形を出したりはずしたりのタイミングが違うので、繰り返し練習しておく。 ・パネルに貼った人形は意味あるときだけ動かす(やたらに触ったり、位置を変えると子どもの注意がそがれる) ・できるだけ正面を向いて演ずる。 ・歌やお話の中で、子どもたちに「これなあに」など問いかけの場面を作り、子どもたちを参加させると、一段と盛り上がる。 ・一人ひとりの子どもの反応を見ながら演ずる。(保育者はパネルシアターの演じ手であるとともに、時には絵人形の一人、パネルシアターの一部であるという意識が大事)</p>

(3) パネルシアターを学んでわかったこと

「パネルシアター」実践指導プログラムに基づいて、授業を行った。最終週に提出されたレポートは、授業の中で設定したテーマ(表1の7月14日)について自由記述としたものである。その内容を分析、検討した結果、類似した内容を整理すると四つの分析視点でまとめることができた。それが表3である。

具体的事例の中には、類似した内容であっても、学生個人によって微妙に異なる様態を示しているものもあった。たとえば、造形的な作業を苦手とする学生の中には、「他の人に比べ、自分の絵はうまくないので嫌だったが、授業なので仕方がない」といった否定的な姿と、「描くことが苦手なので、最初はやる気がなかったが、実演になったら、せりふを言ったり、絵人形を動かしたりして楽しかった。次回からは絵描くことも頑張ろうと思う」といった問題意識をもって体験学習

表3. パネルシアターを学んでわかったこと
回答44名(複数回答可)

分析視点	具体的事例	頻度	%
グループワークの意味	・グループのメンバー全員で協力することが大切だとわかった。	17	40
	・グループで一つの作品を作り上げたという達成感が味わえた。	16	37
	・全体像をつかんだり、どこにどのような絵にするかなど、グループで工夫して取り組む必要がある。	10	23
	・メンバーの中には、初めてかかわりを持つ人もいたが、親しくなれてよかった。	3	7
パネルシアターの魅力	・絵本や紙芝居と異なるよさを知った。	21	48
	・絵人形を出したり、せりふを言ったりしてやるのが楽しい。	18	41
	・物語の選択は、内容のわかりやすいものがパネルシアターにあっている。	15	34
	・パネル全体の大きさにあった絵の大きさや色彩がきれいだった。	11	25
パネルシアターの手法	・役柄や状況に合った声の出し方に注意する。	25	57
	・絵を出すタイミングと声を合わせるのが難しい。	20	46
	・文字で書かれている物語を絵にするのは難しい。	18	41
	・既成概念(ウサギは白、豚はページュなど)にとらわれないで、イメージしたように描くと子どもは楽しめると思う。	11	25
	・歌や効果音を取り入れると楽しさが倍増する。	10	23
	・場面の転換とせりふの練習が大切。 ・子どもに背を向けないように絵を張り替えたり、子どもが見ていることを意識する。	9 3	21 7
自己対象化	・他の人と比べて自分の絵は下手だが授業なので仕方がない。	1	2
	・幼稚園で試したり、次の実習では自分で製作してやってみよう。	13	29
	・子どもにどのように伝えていくか、どのように反応するか子どもの前で実演して確かめたい。	11	25
	・自分で絵を張り替えたり、語ったりする楽しさを実感した。	10	23
	・教材選択から製作、実演することの難しさと楽しさを知った。	9	21
	・自分が楽しんで行うことで、見ている人も楽しめる。 ・描くことは苦手なので最初からやる気はなかったが、実演になったら、楽しかった。次回からは絵描くことも頑張ろうと思う。	5 1	12 2

に取り組もうとする姿（自己対象化）である。全体的には、有意を示している。

学生にとっては、講義の他に保育の実践的な体験を組み入れている講座は初めてということでもかなり興味と関心を持って臨んでいた。「表現」という講座の性格上、「表現」そのものを理論で学ぶ他に、保育者としての「表現」を学ぶためには、直接体験することが必至であると考えている。この体験学習を進めていく過程で、学生自身の中にあるイメージや考えを自由に外へ出そうとする姿が多く見られ、これこそ「表現」と捉えてよいと考える。表3に見られるように、大半の学生は、講義だけでは得られない心情や感覚を多様に経験している。また、学生にとって他の学びとは比較できない充実したものであったと考える。次に、学生の「パネルシアターを学んでわかったこと」の事例を提示し、考察する。

事例1. 学生Wのレポート

パネルシアターをするときに大切なのは、みんなで協力することだと思った。絵を描いたり練習したり、実際にやってみたりする中で、一人でも協力しないしているとよいものが出来なと思った。「ジャックと豆の木」の班は、みんなで協力していて絵を動かすときもせりふを言うときもとてもよい間が取れていて見えてすごいなと思った。…中略

発表は、まず自分が楽しむことで、見ている人も楽しんでくれると思った。恥ずかしがったりするのは見ている人にもそれが伝わってしまうから、自分が積極的に楽しむことが大切だと思った。

学生Wは、パネルシアターの製作から実演までのグループでの作業を通してメンバーの協働が如何に大切であるかを実感している。このことは、保育の現場において保育者同士の連携や協働など、園のチームとして動くことが求められていることの重要性を実体験を通して学んでいると考える。また、演ずるときは演技手はず楽しむことが見ている子どもも楽しむことになることと自己確認を図っていると考える。

事例2. 学生Mのレポート

パネルシアターは、誰にでも簡単に出来るものだと軽い気持ちで考えていた。でも、実際にやってみると、言葉（ナレーション、せりふ）を言うタイミングや絵を動かすタイミング、動かし方など、意外に難しく大変だった。作る段階でも、どのシーンにどのようなキャラクターや物が必要になるかなど、考えることも大変だった。実際、これはいるだろうと作っていたものが使われなかったり、通し読みしているときに足りないものが出てきたりと、まだまだ創造力やよみとる力が足りないのだと実感した。…中略

他の班を見ていて、自分が演じることがばかりに気を取られてしまい、園児が見ていると想定して行っていることを忘れて、台本を見ながらパネルの前で動かしてしまったので、別の機会にするときには気をつけて出来たらいいなと思った。

学生Mは、講義の段階ではパネルシアターはそれほど難しいものではないと思っていたようである。実際に体験してみて自分の創造力や読み取る力の無さを知ったと述べているが、真剣に取り組んでいるからこそわかったことであろう。学生Mは、自分の保育技能（表現力）を高めるための方法と、子どもに楽しく見せるための演じ方について学習の方向性を見出している。

事例3. 学生Tのレポート

パネルシアターを製作から実演までしたのは初めてで、とても楽しくいい経験ができた。ナレーションとせりふの間の取り方を工夫し、絵の貼り替えが上手に出来るように頑張った。本番で人数が少なかったため、練習よりも大変だったけど、実際に子どもの前でやる時は、保育者は一人、二人の場合もあると思うので、少人数でも流れが乱れずにできる方法を見つけたい。みんなで一つの作品を仕上げる事が出来てとてもよかった。機会があれば、もっと練習して、めぐみ幼稚園の子どもたちに見てもらい、反応を見てみたいと思う。

学生Tは、パネルシアターの製作を始める直前に、既成の絵人形を使って演じた経験はあると語っていたが、事例で明らかのように、製作から実演まで全て行った経験は、充実感あふれるものであったようである。しかも、自分が保育者として演ずることを想定した問題意識を挙げている。さらに、自分たちだけで発表しあうだけでなく、実際に幼稚園の子どもたちに見せたい、どんな反応を見せるか知りたいたい、という積極的な姿勢が感じられる。

4. まとめ

学生は、「表現」の授業において、幼児期の子どもにとって表現する意味やその表現を支える保育者の役割について学んできた。本授業で講義の他にパネルシアターの製作、実演を組み入れたのは、これまでの講義での内容の裏づけや確かめとともに、座学の授業では得られない感動体験や技能習得になると考えたからである。つまり、幼児期の「表現」を学ぶということは、保育者志望の学生も「表現する存在」でなければならないし、そこには学生の感受性開発という意味も含まれていると考える。表3にあるように、ほとんどの学生は体験してみても初めて、製作技能や実演のための演技力の必要性を実感している一方で、製作や実演を通してその楽しさや感動を味わい、仲間と協力して取り組む大切さ、さらに、実際の子ども達の前で演じ、反応を知りたいなど、保育者としての願いや必要な資質に気づいたことは意味のあることと考える。殊に、表3にある「自分たちで製作したパネルシアターを実際に幼稚園の子ども達の前で実演してその反応を確かめたい」という学生が3割近くいたということは、「表現モデルとしての保育者」を意識した学生の意見として受け止め、授業者としては大変うれしいことである。実際は、幼稚園では実演できなかったものの、一部の学生は本学のオープンキャンパスで実演することはできた。今後は、こうした学生の要望を実現できるよう、幼稚園側と連携をとりながら進めていきたいと考える。

本授業は、15コマのうち、3コマを費やした。また、受講学生が44名という人数であったことは、この授業を効果的に進めるための教材の量や活動する空間に一考を要する。

今後も引き続き、本授業のように保育者養成に必要な実践的研究や課題を盛り込んだ授業方法を検討していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省【幼稚園教育要領】(2008)
- 2) 厚生労働省【保育所保育指針】(2008)
- 3) 無藤隆・浜口順子【表現】(2008) 萌文書林 31p
- 4) 久富陽子【保育実技】(2007) 萌文書林 118～119p